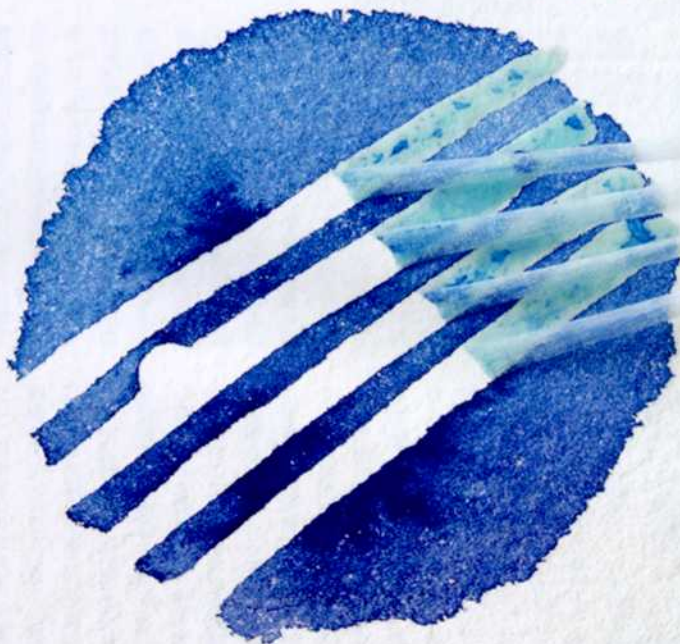


水彩 Technique。

メディウム！



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

＜ホルベイン水彩用メディウムシリーズ＞オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVクロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

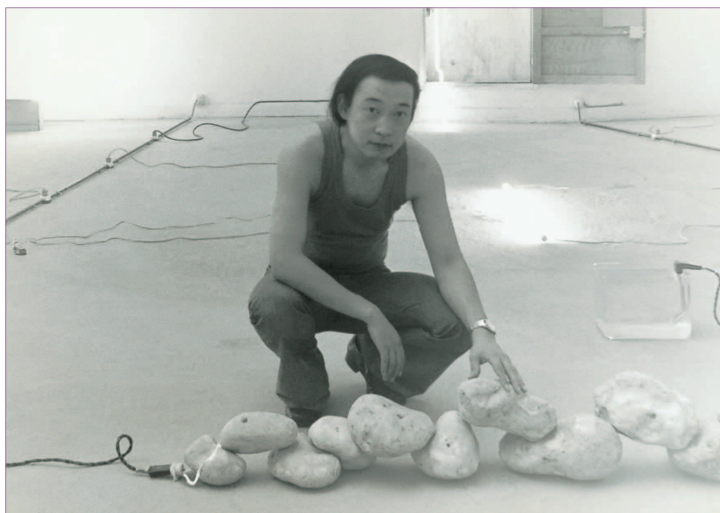
www.holbein-works.co.jp

holbein

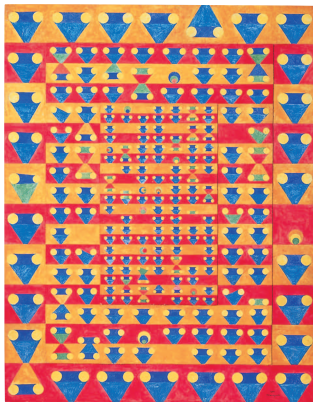
河口龍夫

鷹見明彦 文 森田兼次 写真・印

見えない関係を想像する杖え



1973年、パリ・ビエンナーレに参加。パリ市立近代美術館で《関係-エネルギー》(次ページ上)を制作する。電流を様々な物質に伝導させて、エネルギーが光や音、運動に変化する様子を見せた。作品に使う石が見つからず困っていたら、同展に出品していた韓国人の作家が街の造園店から調達してくれた
撮影=河口千賀子



作品64-10、無機物
1964 麻布に胡粉、水彩
116.5×91.5cm
撮影=斎藤さだむ

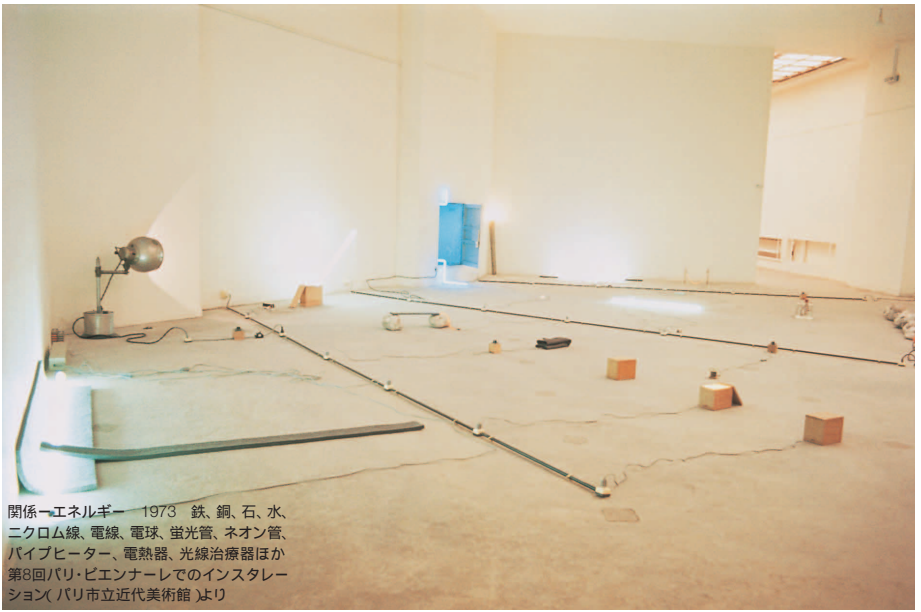
1964 「決まったシステムの 自己否定の絵画 によって、否定しきれない自分は何かを確認しようとした」

千葉県九十九里浜に沿ってつづくサーフウェイを途中で折れて、しばらく行くと、田園の住宅地に新築のアトリイを見いだす。大きな小屋のような三角屋根とターク・グレーの外壁は、種子や植物を鉛で封じた作品で知られる作家の主要作《鉛の温室》を思わせる。

「僕が生まれ育ったのは、現在の神戸の兵庫区。終戦時は5歳だった。疎開先の村では、洪水で家畜や作物が何もかも流されるのを見て、自然の力を体験しました」。

「戦争は大人たちが、もうすべてを破壊し尽くして、壊すものがなくなったので終わったのだと子供心に思った。焼け跡の土に種をまくと、大地から新しい生命が芽吹いてきた。あとから考えると、僕の作品の原点には、そつした子供ころの風景や体験がある。焼け跡の町で、友だちと焼け残った残骸や建物から、元の物や部屋の様子を想像して遊んだりしたことが……」。

小学生のころから絵が得意だった



関係→エネルギー 1973 鉄、銅、石、水、ニクロム線、電線、電球、蛍光灯、ネオン管、パイプヒーター、電熱器、光線治療器ほか
第8回パリ・ビエンナーレでのインスタレーション(パリ市立近代美術館より)

1973

「自分が作品をつくるというよりも、人類がエネルギーを扱うという意識で制作しました」

た。中学になると神戸市民美術教室に通って、大人に混じってデッサンを学んだ。当時は、日帰りで倉敷の大原美術館に行ったり、京都の美術館でル・ヴル美術館展を観るくらいだっただけで、とくにどの画家にも影響されることはなかった。それよりも幅広く知ってから、自分はどうすべきか決めたいと思っていた。

1958年、上京して、多摩美術大学絵画科に入学。福沢一郎、建畠覚造の授業や講評を受けた。福沢先生は、批評会のために遠慮して数点見せようとする、他の作品も全部丁寧に見て、意見を聞かせてくださった。建畠先生からは、ヘンリー・ムーアを例にプラスとマイナスの空間について教わった。自分でルネサンスの美術史を読んだり、1作ずつキュビズム、シュルレアリスム……と課題を決めて制作するようにしました。

60年安保闘争時には、街頭デモに参加。国会前の歴史的なデモの渦中にいた。噂やデマが飛び交って状況が変わっていくのを、動かされる側で体験して、あらためて人間を感化



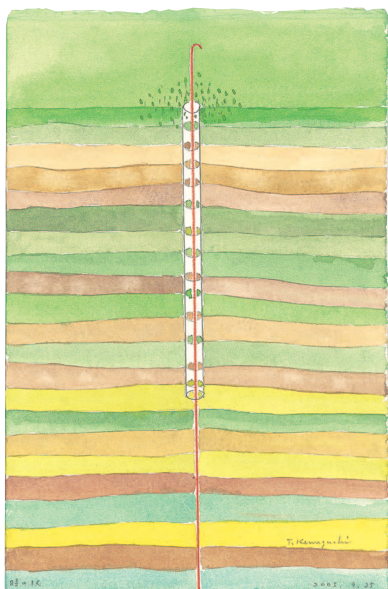
関係 種子 1986 鉛、種子(さつまいも) 45.8×36.1cm 撮影=斎藤さだむ

したり共鳴させたりする芸術の力について考えた。

《作品64 10、無機物》(1964)は、初めての銀座のギャラリーでの2人展に出品した初期作の1点。クレーの展覧会を観る機会があったので、作品の小ささと内容の豊かさ、深さに感銘を受けました。クレーの日記を読んで、画家も讀書し思索するべきだと促され、クレーが読んだ本のリストをつくって読めるものはできるだけ読みました。

《無機物》では、たとえば円と円をむすぶシステムを決めて、自己否定の絵画によって、否定しきれない自分は何かを確認しようとした。

花田清輝や岡本太郎が説いた対極主義などに刺激を受けて、アン



関係 時の杖 2004 ブロンズ、真鍮、銅
224×1260×400cm(杖の全長)撮影=山本糾
国際芸術センター青森(安藤忠雄設計)の庭に設置された作品。コンクリートの壁面には、作家による詩が和文と英文で銅製の文字によって記されている。(かつて地表であった地底に/長きブロンズの杖をつくとき/過ぎ去りし時間の波紋が/杖の先端から杖の握り手に/振動する/あたかも過ぎ去りし時間も/悠久であるかのように/鼓動する)

関係 時の杖(エスキース) 2005 紙に水彩、色鉛筆 26.5×18.2cm

2005 「見えないものを想像させることで、 芸術と地下の世界は共通している」

「東京ヒエナール1970 人間と物質」展(東京都美術館)には、神戸の須磨海岸の渚に4枚の板を固定し、潮汐が変化する様子を定点撮影した「陸と海(1970)」を出品。70年以降に多く試みられるようになった日本の現代美術における、写真によ

る作品の代表作のひとつになった。《関係 エネルギー》(1973)は第8回パリ・ヒエナールの出品作。電線や物質の伝導によってネットワーク化された電流が、光や熱、音、運動に変容する様相を見せた。自分が作品をつくるというよりも、人類がエネルギ―を扱うという意識で制作しました。日本と違ってはつきりと賞賛してくれる人が多いのも驚きだったけれど、おまえの作品は、東洋的だという意見もあった。(「神教のむこうからすると、汎神論的な表現に見える」と)。

70年代のはじめからは、様々な物と現象のあいだにあつて世界を構成している関係が、作品のキー・コンセプトになった。

《関係 種子》(1986)は、170種以上の種子を鉛板で覆ったシリーズの1点。電流、錆、温度、摩擦、星からの距離……現象となつてあらわ

れる世界との関係を探索するなかで、80年代半ばから、鉛で種子や植物をコートینگし外気から遮断するシリーズを多く制作した。86年

デバンタン'64展や「京都アンテナダン」展に参加するとともに、65年には、神戸にもどつて地元作家たちと「グループ位」を結成した。「岐阜アンテナダン」展(1965)で、同グループは長良川の河原に10メートルの穴を掘り、埋めもどす行為を行った。「既存の表現の枠をはずした解放感と、もう引き返せないという切迫した気持ちがあつた」。

60年代の後半には、ハーフ・ミラーとブラック・ライトを使つたり、地図、書類などによるコンセプトチュアルな作品を制作した。そのころ美術評論家の中原佑介が企画共同企画者(石子順造)した「トリックス&ビジョン」展(1968)や現代日本美術展などに精力的に出品した。70年に開催された中原「ミッシヨナー」による「東京ヒエナール1970 人間

千葉県長生村のアトリエにて。長年教鞭をとった筑波大学を退官後、房総の海辺に新しいアトリエをつくり、2年前に移住した。ダイアリーのように貼られた作品の完成後にも描くというエスキース。様々な想像の地層へ《時の杖》が伸びている【*】



にソビエトで発生し世界を震撼させたチエルノイリ原発事故による放射能汚染や、縄文遺跡から発掘されたハスの種子が発芽したコースがきっかけになったと作家は語っている。89年、ボンビドゥー・センターで開催

かわくち・たつお 1940年兵庫県神戸市生まれ。62年多摩美術大学絵画科卒業。65年前衛集団「グループ位」結成。68,73年ジャパン・アートフェスティバル優秀賞、2003年宇宙市現代彫刻展・兵庫県立美術館賞受賞。現在、筑波大学名誉教授。主な個展に68年村松画館(東京)、75年南画館(東京)、84,87年雅陶堂ギャラリー・竹芝(東京)、86年大阪府立現代美術センター、89年ヒルサイド・ギャラリー(東京)、90年神奈川県立近代美術館、97年千葉市美術館、98年水戸芸術館現代美術ギャラリー(茨城)、いわき市美術館(福島)、99年京都市美術館、03年釜山市立美術館(韓国)、ヒルサイド・フォーラム(東京)、04年名古屋市美術館、05年国際芸術センター青森、91,00,05年横田茂ギャラリー(東京)など。主なグループ展は、65年「グループ位」展(神戸国際会館ギャラリー)、「岐阜アンデパンダン」展、70年東京ビエンナーレ1970(ニューヨーク)、00,03年越後妻有アートトリエンナーレ(新潟)、02年「美術の力」(兵庫県立美術館)、04年「痕跡」(京都国立近代美術館、東京国立近代美術館)、「グループ位」展(兵庫県立美術館) 05年「東京府美術館の時代 1926-1970」(東京都現代美術館) など

された、大地の魔術師たち」展での《関係 種子、土、水、空気》(1986)は、《関係 種子》と土、水、空気をそれぞれ封じた金属カプセルを展示した。

《関係 時の杖》(2004)は、国際

芸術センター青森で開催された個展の前年に同館に設置した最近作の1点。広場の中心に真鍮製の丸鏡を置いて、鏡と地層を貫くように4メートルほどの長さのブロンズの杖が、握り手を残して埋められた。「種子の作品では誕生を、近年の化石の作品では死と時間をモチーフにしてきて、杖も自分を含めた老いという生命の時間へのつながりから」。

「青森では、近くに縄文遺跡があることが、地層に関わる作品の構想を生みました。見えないものを想像させるということでは、芸術と地下の世界は共通している」。

壁には作品の完成後にも描くというエスキースが並んで、時の杖が様々な想像の測りを地層に伸ばしている。戸外に出ると、海辺の闇があたりを蔽っていた。種子をタイム・カプセルにした作品を集積した小屋が、シエルトの影のように黙っていた。

たかみ あきひ(美術評論家) 2005年11月12日、千葉県長生郡長生村の作家アトリエにて取材